

英語プレゼンテーションセミナーを開催しました



平成27年2月2-3日、旦野原キャンパス教養教育棟において「英語研究プレゼンテーションワークショップ」との題で5時間集中講座の英語プレゼンテーションセミナーを2部構成で開催しました。教職員と大学院生を中心に1部2部あわせて50名が参加しました。リンクサイエンスの川上輪子講師より、講義1: 効果的な日本の聴衆へのプレゼン・アプローチと海外の聴衆へのアプローチはどう違うべきなのか、講義2: レトリカル・クエスションを使った定義の述べ方、講義3: 視覚教材のデザインのコツ、講義4: 効果的な質疑応答の対処の仕方、という4つのテーマにそって学びました。

英語プレゼンテーションセミナー参加の教育学研究科 瀬口珠美さんから

皆さんは“presentation”という言葉日本語にどう訳すだろうか。私は「プレゼン」と訳す。ちょっとずい解答かもしれない。どうしても日本語に訳すならば「発表」だろうか。大学や企業では前者が、中高各学校では後者がよく使われているように思う。

人前で話するのが得意な人もいれば苦手な人もいる。日本人は苦手な人が多いのか、講師がこのようなことをおっしゃっていた。「日本人のダメなプレゼンの一つに、難しい言葉をちりばめて、原稿を一方向的に読む、というパターンがある。」

私は英語が好きで、英語の発音を真似て歌ったり、人前で話するのは苦にならない子どもだった。おかげで今でもプレゼンやスピーチの類は、上手い、下手は別として苦にならない。原稿は用意するが原稿をそのまま読むよりも聴衆の反応を見ながら話したいので、内容を覚えておいて、自分の言葉で話すようにしている。今回のセミナーで、こういったやり方が決して間違いではなかったと知って自信がついた。将来、英語教員として教壇に立つ時が訪れた際には大いに役立てたいと思う。

大学の講義以外でこのような学びと経験の場が与えられたことには深く感謝している。このような機会には是非また参加させて頂きたい。



大分大学 女性大学院生の研究と大学生活 理工系の魅力を紹介！ 高校生・後輩へのメッセージ



あそ まい
麻生 舞妃さん

大分大学大学院工学研究科
福祉環境工学専攻
修士1年
(大分県出身)

研究内容

私の研究は、電磁波逆散乱問題の解析です。逆散乱問題とは、物体に電磁波を照射し、散乱データから物体の媒質定数等を推定する問題です。医療分野での生体可視化技術や、工学分野での非破壊検査等に应用されます。私は、対象物体を誘電体円柱とし、比誘電率の適用範囲拡大に向け、各パラメータの影響を分析しています。

進路決定のきっかけ

理系を選択した時から、工学部以外は考えていませんでした。工学部の分野は多岐に渡り、高校生の私には将来何をしたいかという明確なビジョンがなく、すごく悩みました。そんな時、祖父が入院することになり、私は病院に通うようになりました。治療を進めていく中で、祖父を支えているのは、医療従事者だけでなく、多くの医療機器であると気付き、私も誰かの支えとなる何かを作りたいと考え、電気電子工学を目指しました。入学後、いかにかこの分野が私達の生活を支えているかを実感し、さらに専門性の高い知識を身につけたいと思い、大学院に進学しました。

工学部・工学研究科の魅力

私の所属する電気電子工学の電子コースでは、学部2年次から班に分かれ実際に回路を組み、実験を行います。各実験装置の扱い方の基礎の習得や、回路素子の特性を確認すると同時に、様々な現象の解析、考察をしていきます。実験では、必ずしも理論値と測定値が一致するとは限りません。理論と異なる時の原因を探る時は、基礎知識はもちろん、応用力も求められ、自身のスキルアップに繋がります。全てのテーマを実習した後、班ごとにプレゼンを行います。技術者として社会に出ていく前に、人前で話す力を養うことができます。工学部は結果だけでなく、なぜ?どうして?が重要な分野です。とことん、自身と向き合いたい人にはとても魅力的だと思います。

高校生・後輩へのアドバイス

大学では、これまでの受動的な学習よりも主体的な学習が求められます。自分の自由な時間を、いかに有効に使うかが大切です。また学業だけでなく、少しでも自分のやりたい事があれば、積極的にチャレンジしてください。大学の4年間は長いようであっという間です。目標を持って、有意義な学生生活を送って欲しいです。

麻生さんは、平成26年度電子情報通信学会九州支部学生会講演奨励賞を受賞されました。

平成26年度新規開講授業「男女共同参画入門」

「大分大学男女共同参画行動計画(第2期)」に掲げた「男女共同参画に関する啓発活動と教育研究の推進」の具体的な取組の一環として、平成26年度後期10月から全学部生を対象に、教養教育科目「男女共同参画入門」を開講しました。



【授業15回(講義11回+グループワーク4回)】 毎週水曜日3限(13:10～14:40)

回	授業内容	担当講師名(所属)
1	オリエンテーション：日本は男女平等社会なのか？	松浦 恵子(医学部) 大下 晴美(医学部)
2	男女共同参画社会の実現に向けて	井上 昌美(産学官連携推進機構)
3	法律から見た男女共同参画	秋山智恵子(経済学部)
4	「育児の達人」養成講座	大野 歩(教育福祉科学部)
5	学内で、女性の子育てと仕事の両立やイクメンの子育てについての体験談を聞こう(体験者による座談会)	男性教員(経済学部) 男性教員(経済学部) 女性教員(教育福祉科学部) 女性教員(工学部)
6	医学から見た男女共同参画	中川 幹子(医学部)
7	男女共同参画をテーマとしたDVDの鑑賞	大隈ひとみ(教育福祉科学部)
8	行政から見た男女共同参画：大分県	稗田 淳主幹 (大分県消費生活・男女共同参画プラザ<アイネス>)
9	社会学・歴史学から見た性の問題	杉田 聡(医学部)
10	ワークライフバランスと男女共同参画：大分労働局	手塚 和子室長(大分労働局雇用均等室)
11	日本は本当に男女平等社会なのか？【再考】	大下 晴美(医学部)
12～15	グループワーク： 男女共同参画社会の現実に向けて 大分大学からの提言	

履修生は98名で、学部別では教育福祉科学部37名、経済学部49名、工学部12名、男女比は男性50名、女性48名でした。授業を担当して下さった先生方の所属は、教育福祉科学部4名、経済学部4名、医学部5名、工学部2名、産学官連携推進機構1名、大分県1名、大分労働局1名です。



オムニバス講義の中では、内閣府よりパンフレット「ひとりひとりが幸せな社会のために」(平成26年度版)の資料提供をいただきました。

また座談会では、環境の違う講師4人の子育てについての紹介があり、特に男性の育児、国際結婚の育児など、学生にはとても印象に残る講義となりました。

講義11回の学修成果のまとめとして、男女の性別にかかわらず個性と能力を十分に発揮することができる社会の構築を目指して、学生たちが自分たちの提言をA0サイズ1枚のポスターにまとめて、グループ発表を行いました。

【グループワーク】

履修生98名が16グループ(1グループ6名)に分かれ、「男女共同参画実現に向けて～大分大学からの提言～」をテーマに学生が主体的に課題へ向き合い、ポスター作成、口頭発表に取り組みました。

学部・学年・性別が違う、この授業を履修しなければ知り合う機会のなかった多様な人との交流により、アイデアを提案する力、アンケート調査を行うなどの企画力、情報収集力、ポスターデザイン力そしてリーダーとしてまとめる力など新しい自己の発見と広がり、また達成感を体験するためのグループワークを行いました。

グループワークの回数が少なかったこともあり、男女共同参画についての認識度の不十分さや調査の足りなさなど、次回の課題とすべき点多々ありました。

1月7日
グループワーク



1月21日
予選会



テーマ：男女共同参画社会の実現に向けて ～大分大学からの提言～

サブテーマ

- 女性が働き続けることができる社会の実現
- 固定的性別役割分担意識のない社会の実現
- 指導的地位の男女比がほぼ均等な社会の実現
- 男女労働者間の格差のない社会の実現
- 男性が子育て・介護に積極的に参加できる社会の実現
- ワークライフバランスのとれた社会の実現
- 女性に対する暴力のない社会の実現
- 多様な働き方が可能な社会の実現

授業の講師とグループワークの発表審査をお願いした井上昌美先生から、 ご意見ご感想をいただきました。

本授業において、男女共同参画社会に関わる日本の現状と課題について理解を深め、社会を構成する一員として、受講生が男女共同参画社会の実現のために考え・行動する機会(きっかけ)となることを目的とし、最新の公開データ^{*1}や男女共同参画社会の実現に向けた企業の取り組み事例等について講義をしました。グループワーク発表会の審査員としては、特に、選定した課題の解決案の提示までの取組(調査・議論等)の流れに着目し、審査を行いました。

男女共同参画に関しては、概して「女性のためのもの」と感じる人が多く、男性にとっても重要な課題であることが理解されにくいと言われています。しかし、本授業では、受講生が男女ほぼ同数であり、共に熱心に講義に参加していました。また、グループワークの成果の発表会やポスターの内容からは、例えば「固定的性別役割分担意識^{*2}」等の課題に関し、それぞれの立場から意見を出し合い議論をした様子が窺えました。

このような状況から、受講生にとって、これまで直面する機会がなかったと思われる男女共同参画社会に関し、正面から向き合う機会となり、男女共同参画社会に関する現状や課題の理解、男女共同参画社会の実現につながる意識の醸成に資する授業になったと思います。



一方で、発表会までに受講生が調査・議論するための十分な時間を確保できなかったこと、地域への情報の発信方法等、検討すべき課題が残されています。次回、このような課題や受講者からの要望を踏まえて改善し、より良い授業となるよう、男女共同参画を推進する一員として積極的に参画したいと考えています。

【産学官連携推進機構 産学官連携部門 井上昌美】

*1「ひとりひとりが幸せな社会のために平成26年版」(内閣府男女共同参画局よりご提供戴いた資料)や男女共同参画白書(平成26年版)のこと。

*2「男は仕事・女は家庭」等のように性別を理由として、役割を固定的に分ける考え方のこと。

授業を振り返って

この「男女共同参画入門」の授業の終了時に、学生による授業評価を実施しましたので、その結果も踏まえ、授業を振り返ってみようと思います。

開講するにあたって、3つの柱を立てました。1つは男女共同参画の現状と取り組みを多角的に見る、2つめは地域連携を視野に入れる、3つめは座学に留まらず、学生自身が考え、意見を発信する機会を設ける、というものでした。

第1の柱は、ご協力を得て、全学部から講師として出て頂き、法律、保育、医学、社会学など様々な分野から見る事が出来たと思います。2つめの地域連携に関しては、大分県のアイネスと労働局の方に講師をお願いし、地元の地方行政での実態と取り組みをお話し頂きました。以上の2点に関しては、授業評価アンケートでも好評で、

- いろいろな先生が来てくださったので、毎週新鮮な気持ちで授業を受けることができた。
- 毎回講師が変わって、様々な視点から男女共同参画社会を学ぶことができて良かった。

といったコメントが数多く見られました。第3の柱の学生が自らの問題として考えるという点に関しては、グループワークとグループ発表という形を取りました。そこでの主眼は、グループワークによって男女共同参画への理解を深めることに加え、グループ内で忌憚のない意見を交わせ、共通理解を見出し、一つのものにまとめるという共同作業を行うことでした。それに関しても、

- 今まで男女共同参画社会について考える機会は少なかったが、グループワークを通して見直すことができ、自分たちにも出来ることがあると思えた。
- 知り合っていなかった人どうしてグループを組み、同じテーマについて意見を出し合い、一つのプレゼンテーションを作りあげることで、友人関係がひろがり、楽しく学ぶことができました。
- 今までそこまで真剣に考える機会がなかったので、今回の講義はとても貴重な体験になりました。

などとおおむね好評で、授業の狙いはおおむね達成できたのではないかと思います。ただ、評価コメントにも記されていたように、グループワークの時間が短すぎ、その結果、これまでの学習を振り返り整理した上で、自分たちの考えとして掘り下げ、まとめるという作業が十分にはできなかったグループもあったようです。また、せっかく設けたポスターや発表へのピア評価の機会も時間の関係で、うまく活用されずしまいに終わってしまい、次回への課題となりました。

- ほとんどの授業の結論が同じになってしまったため「また同じか」となることが多かった。
- グループ発表に自主性が少ない。男女共同参画を批判してはいけないのか。

という率直な意見からも分かるように、一部とはいえ、ある種の窮屈さ、更には思想の押しつけめいたものを感じた学生もいた訳で、反省させられると同時に、この種のテーマ自体が持つ共通理解の難しさを痛感させられました。

その中でも、「きっと将来まで記憶に残り続ける授業だと思います」とコメントしてくれた人がいました。このように、社会に出て実際にそうした場に遭遇したとき、この授業が改めて考えるきっかけになってくれたら講義も有意義なものになると思います。

【男女共同参画広報・地域連携部門長 雲 和子】

授業の最終日(平成27年1月28日)には、グループワークの成果の発表会を行い、予選(1月21日)を勝ち抜いた4チームが発表をしました。審査には阿南理事、授業担当講師、大分県 稗田 主幹、男女共同参画推進室部門委員と学生も参加し、評価を行いました。

グループ発表では最優秀賞、優秀賞、3位を、ポスター審査ではアイネス賞、理事賞、室長賞を決定し、表彰しました。

最優秀賞 8班



優秀賞 7班



男女共同参画

キャンパスセミナーのご紹介

「ダイバーシティ」の活用、何？

平成27年1月23日に旦野原キャンパス事務局棟の会議室において、就活直前の3年生の学部学生、職員、教員約80人に対して、日本アイ・ビー・エム(株)執行役員の志済聡子氏に「日本IBMにおけるダイバーシティ推進の取り組み」について、学生にも職員にも心に響く、元気がでる話を自らの経験を交えながら伝えて頂きました。お話の内容は、**男女を問わず就活する学生に役立つもの**ですので、少し詳しく以下にご紹介します。

日本IBMにおけるダイバーシティは、「①女性、②LGBT (Lesbian, Guy, Bisexual, Transgender)、③障害者、④外国人」を対象者としています。これらの方々との相違点から学んだ価値を社会へ還元する使命感をもって、多様な方の能力を最大限に成長させることで経営を向上させようと努めている企業です。このような「多様性」を組織が受け入れると居心地が悪い環境になりますが、それでも多様性をトップダウンの形で積極的に活用しグローバル企業として活躍されています。

「育児している女性の単位時間当たりの生産性は極めて高い」ことから女性の積極的登用については1998年から「辞めない、泣かない、覚悟を決め」て**自律、自立、自覚の3J**ができる社内の女性を集め、女性のキャリアアップを阻害している要因分析を踏まえ、改革をトップダウンで展開されています。日本IBMの橋本会長によると「**優秀な女性は引き続き積極的に登用し、女性管理職の世代間の距離が開かないように、継続的にロールモデルを出していく必要がある。リーダーとしての女性は、静かでおとなしい人物ではダメ。「とがった」女性を持ってきて走れるか？「とがった」女性が必要である**」との認識で動かれています。人事評価は、仕事の業績に加えて、いま、大学の教育改革でも指摘されている「コンピテンシー（ジェネリックスキル、汎用力、社会人基礎力）」の二つの軸の視点から実施されています。具体的な評価能力は「**相手にインパクトを与えるコミュニケーションができるか、あくなきチャレンジ精神をもっているか、グローバルIBMと連携できるか、絶え間ない変革ができるか、情熱をどの程度持っているか**」です。



このような組織で営業本部長としても指揮されている志済聡子さんは、旦那さんと、大学生の娘さんをお持ちで、学生にとっては自分のお母さんと同世代の方になります。志済さんが、大学を出て就職した1986年の就活では、あからさまに男女が隔離された就活を経験した時代です。学生のお母さん方のほとんどは、男女の区別と差別が当然のこと、仕方が無いこととした就職観をお持ちだと思えます。志済さんも最初から出世コースに乗っていたのではなく、平の社員として懸命に努力し、子育てをしながら文句をつけようがない男性に負けない業績数値を残し、キャリアを積まれた方です。

現場からたたき上げて業績を積み途中で管理職の声がかかり、その誘いを「私にはできそうもない、これ以上忙しくなるのはいやだな」などとして拒むことなく、その機会を活かしてさらにステップアップされています。講演の中では、昇進の声がかかった場合、男性の場合は能力的に出来る、できないによらず「はい」と答えるのに対して、女性は7割ぐらいが自分の限界を自分でつくってそのチャンスを活かさない傾向があるとのことでした。就活時に「24時間勤務、単身赴任、全国どこでも、国外勤務も可能」と断言して入社した女性でも、実際に、結婚し子供ができて家族の生活が入ると困難な問題に直面する現実があることと同じ理由のためでしょう。



自分のお母さんと同じ世代の女性が、大変な努力と実績を重ねられて、50代の女性役員となり、グローバル企業で両足を地につけて自信を持って組織を動かしている様子は、学生、特に、女子学生にとり優れたロールモデルになったと判断しています。また、男子学生にとっては、潜在的に男女を区別する意識に気付かされ、働くことへの真摯な姿勢も伝わった様子です。

次は、この講演を聴いた後に提出してもらった女子学生の文面です。

女子学生の声

Aさん 男性に埋もれず、仕事をこなしている女性はかっこいいと思いました。働きたいとは思っていても自分に自信がなく、志済さんは輝いて見えました。今、就職活動をするにあたって自分と向き合っているところであり、仕事を主戦場にできるか、困難な仕事に腹をくくって挑戦できるか、今自分に問われた時にどう答えるだろうかなど自分の考え方と照らし合わせながら聞くことで、将来設計を考えることのできる有意義な時間となりました。人生の幸せは、自分が生きている世界が輝いて見えるかどうかであると思うので、一人の人として会社に、社会に必要とされる人材になり魅力を増すことができるのであれば幸せであると思いました。自分はどうなりたいかをよく考え、勇気を持って行動すること、今更自分には何も能力がないと思うのではなく積極的に勇気を持てるように努力することを怠らないようにしたいです。また、自分の知らない世界を知ること忘れず常に前進できる女性になりたいと思いました。

このような講演で男性に比べ女性の方から働かされている話を聞く機会はあまり多くないので、今回の講演はとてもいい機会になりました。ありがとうございました。

Bさん 講演を聴いて、ダイバーシティについてこれまで以上にとても身近な問題として考えることができたように思います。

私は、今の時代、女性が社会に出て働くことは普通だと思っているつもりでしたが、講演を聴く中で、私は本当は少し偏った考えだったかもしれないと思うようになりました。例えば、夫が仕事ばかりで家庭のことを何もしなくてもそこまで何も思わないですが、妻が家庭のことを何もしない、と聞くと、なぜかその人は妻としてダメなのではないかと思ってしまいました。私にも、女性は結婚したら仕事より家庭を大事にするものだという偏見があるのかもしれないと思いました。



講演で、社会の中での、女性がこうあるべきだというのが、個人の思想を束縛していると言われていましたが、私も実はそうなのかもしれないと思いました。

私は将来、しっかり働いて社会の役に立ちたいと思う一方で、結婚してゆったりしたあたたかい家庭を持ちたいという夢もあります。なんとなく両立できない気がしていますが、ダイバーシティについてやいろいろ勉強したり考えたりすることで、変わるいいと思いました。

Cさん 今まで何人かの女性の講演をしているのを見たことがありますが、その中でも人前で話すのが非常にうまい方だという印象を受けました。立ち振る舞いも凛としていて、こういう方が仕事の先輩にいてくれたら心強いだろうと思いました。

講義の内容についても、女性である自分が今後社会参加をする上でどのようなことを考えて就職や進学に臨むべきかを改めて考えさせられました。また現在も実際に職場で働いている方からの経験に則した意見ということで、非常に為になる情報だったと思います。今後自分がどのような進路を選んでいくかを考える上で、今回の講義で得たアドバイスを活かしていきたいと思います。

話が戻りますが、志済聡子さんが講演の後半で面白く、大切なことを伝えられました。それは、組織のトップは女性の活用と声高に示すが、企業の多くの女性との間に位置する「**中間管理職の意識と行動**」がIBMでも問題とのこと。志済さんは、この**中間管理職の意識を「分厚い粘土層」と表現**されています。「**〇〇さんは無理しなくても良いよ**」ではなく、「**真に実力がある女性社員を本気で育てるつもりがあるか**」が重要であること、そして、従来の正社員による長時間労働の常識を捨て、短時間で質が高い仕事への評価が必要なことも指摘されています。一方、働く女性に対しては、「仕事を自分の主戦場と覚悟できるか？ 困難な仕事に腹を括って挑戦できるか？ 女性同士のつながり、相互作用を生み出せるか？」と女性に限らず働く方みんなが大切にすべきことを説かれています。



【男女共同参画キャリア部門委員 石川 雄一】

●男女共同参画キャンパスセミナー(旦野原)は、「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」の一環として実施しました。